

2008-2009年青森県におけるハクチョウ類の越冬状況

阿部誠一

035-0083 青森県むつ市大平町43-1

はじめに

青森県内のハクチョウ類の飛来状況については、日本白鳥の会が行っている毎月第2日曜日に実施する「白鳥類定時定点調査」と、これに加えた主要な飛来地の調査により、ほぼ県内一円について知ることができる。これらの調査は、白鳥の会会員の他に、日本野鳥の会会員や白鳥保護活動をしている方々の協力を得て行っている。

青森県では、秋にハクチョウ類が移動を終え、県内の各地に越冬のため飛来して定着するのは12月下旬から1月である。2月下旬になると、すでに移動して来た群れが見られる。したがって、越冬の状況を知るには、1月の調査結果が最も有効であるといえる。さらに1月の調査は、日本野鳥の会青森県支部と弘前支部が県内一円のガン・カモ・ハクチョウ類の調査を行っていることから、ハクチョウ類については実数に近い記録を得ていると思われる。

次に、2008年4月に秋田県十和田湖畔で発生したオオハクチョウの鳥インフルエンザ問題で、青森県ではハクチョウへの餌やりが自粛された。これを受けて各飛来地では自粛の措置をとったが、実際は中止となっている。県内では餌やりが行われている飛来地があり、「特定の人による定期餌やりに加え、一般人が不定期に餌やりをする」場所と、「一般人だけが不定期に餌やりをする」場所とに大別される。定期的に餌やりを行っている場所は、県内では飛来数が多い。また、一般人の訪れる場所でも多くは現地で買い求めたパンなどを与えている。

そこで、今回は2009年1月11日の越冬状況と、餌やり自粛の影響など過去5年の調査記録と合わせながら報告したい。

1. 青森県のおもなハクチョウ類飛来地

青森県内では、図1のように飛来地として大きく9地域に分けられ、おもな越冬地として30か所が挙げられる。その内訳は、陸奥湾を中心にした海岸部や河川の下流部が15か所、湖沼5か所、内陸の河川・農業用溜池など10か所である。この他にも、移動の時期にはこれら周辺の田圃や池沼に飛来する。

飛来地名を挙げると次のとおりである(図1参照)。

十三湖：五所川原市十三湖.

津軽：藤崎町平川、黒石市浅瀬石川、弘前市平川.

下北半島北部沿岸：大間町海岸、むつ市大畑川.

陸奥湾北部：むつ市大湊湾、むつ市西通海岸、横浜町三保川.

陸奥湾南部：野辺地町野辺地川、平内町浅所、青森市野内川、青森市赤川、青森市新
城川、青森市西部海岸、蓬田村海岸、外ヶ浜町海岸.

小川原湖沼群：六ヶ所村尾駁沼、六ヶ所村鷹架沼、東北町小川原湖.

三八上北：七戸町坪川、十和田市奥入瀬川、おいらせ町間木堤、おいらせ町根岸堤、
五戸町五戸川、南部町馬淵川、三戸町熊原川.

太平洋：八戸市馬淵川、新井田川.

十和田湖：十和田市十和田湖.

2. 県内の越冬状況について

表1は、2004年からの1月第2日曜日のハクチョウ類調査結果である。2007年はやや増加しているが、それ以外は5,500羽前後で越冬数は安定した状態であった。これに対し、2009年は4,225羽で、過去5年間の平均5,798羽に比べ1,573羽の減少となった。種別では、オオハクチョウが大きく減少しているのがわかる。越冬数が少ないコハクチョウはほぼ例年どおりの結果となった。

次に、2009年の地域別の記録が表2である。また、図2はその割合を示したものである。結果は、陸奥湾1,434羽(34%)、小川原湖沼群1,387羽(33%)となり、2地域で2,821羽、全体の67%を占めた。次いで、津軽576羽(14%)、三八上北468羽(11%)、太平洋140羽(3%)、津軽海峡105羽(2%)、十三湖88羽(2%)、十和田湖27羽(1%)であった。

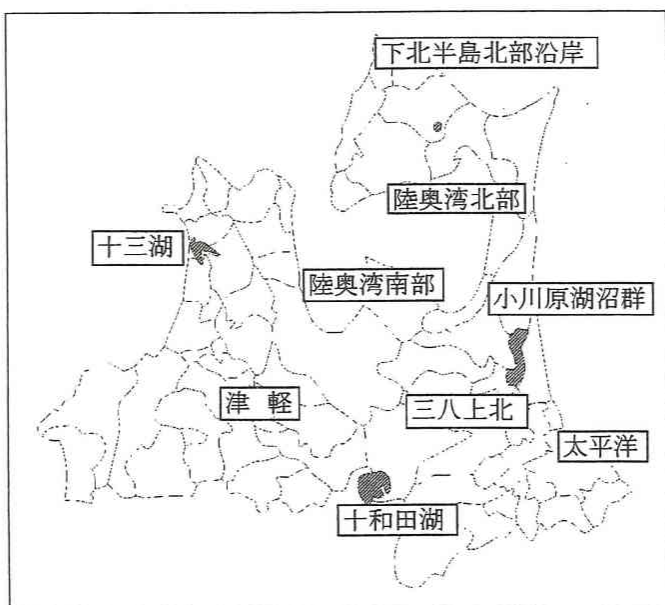


図1. 青森県のハクチョウ類飛来地.

表1. ハクチョウ類の年別飛来数

年	単位：羽					
	2009	2008	2007	2006	2005	2004
オオハクチョウ	4,129	5,552	6,338	5,581	5,530	5,451
コハクチョウ	96	112	87	40	134	165
合計	4,225	5,664	6,425	5,621	5,664	5,616

表2. 2009年地域別ハクチョウ類記録 (2009年1月11日)

地域	津軽		小川原		三八		十和田	
	日本海	陸奥湾	海峡	太平洋	津軽	湖沼群	北上	
羽数	0	1,434	105	140	575	1,387	458	27

表3. 2004-2008年の平均と比較

地域	津軽		小川原		三八		十和田		
	日本海	陸奥湾	海峡	太平洋	津軽	十三湖	湖沼群		
2009	0	1,434	105	140	576	88	1,387	468	27
2004-08	23	1,527	70	183	807	92	1,283	1,582	251

表4. 場所別の記録

場所	単位：羽					
	青森市	七戸町	十和田市	十和田市	十和田市	藤崎町
	野内川	坪川	奥入瀬川	十和田湖	間木堤	平川
2009年	44	44	18	27	43	117
04-08年	166	430	124	251	471	261

日本海は、これまで約30羽前後を毎年記録していたが、今回は記録されなかった。

さて、2009年は越冬数が安定していた過去5年の平均に対し、1,573羽の減少となった。どの地域が減少したのか過去5年の平均と合わせて比較してみる。表3は、2009年の記録と、2004年から2008年までの記録の平均を表したものである。まず、青森県内の多くを占めていた陸奥湾と小川原湖沼群はこれまでとほぼ同じ結果となっていた。また、津軽海峡や太平洋・十三湖ではやや増減があるものの、大きな変化ではなかった。津軽では、230羽が減少し平均の約70%になった。最も大きく減少したのは、三八上北が平均の約30%、十和田湖は約10%であった。

図3、4は、小川原湖南部の上北町越冬地の写真である。定期と一般人とが餌を与えている。

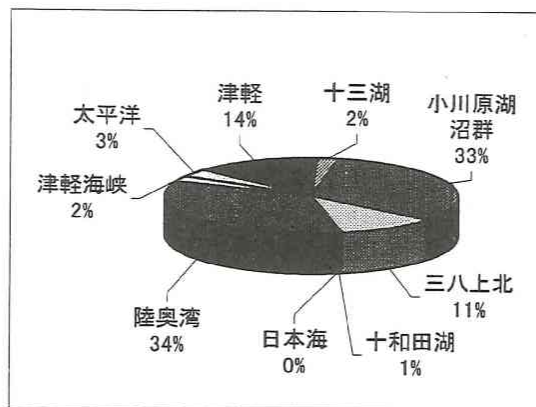


図2. ハクチョウ類の地域別の割合.

図3は2007年1月の様子で、300羽を越すこともある。図4は2008年12月の状況で、数羽に減少している。



図3, 4. ハクチョウ類飛来地の状況.

3. 場所別の記録

青森市野内川では、陸奥湾の河口部付近に200羽以上が飛来する。定期の他に、付近の住民が訪れて餌やりをしている。今回は26%に減少した(図5-1)。

七戸町坪川は、小川原湖南部に注ぐ高瀬川に合流している。ここでは川の中流域に飛来し、500羽を越す記録もある。定期の他に、付近住民も餌やりをしている。今回は10%に大きく減少した(図5-2)。

十和田市奥入瀬川では中流域に飛来地があり、300羽を越す記録もある。定期の他、周辺住民が訪れて餌やりをしている。今回は、15%に大きく減少した(図5-3)。

十和田市十和田湖では湖の南部の休屋に飛来する。最近は個体数が増加傾向にあり、300羽を越すこともある。定期の他、観光客が土産店で購入した餌用のパンを与えている。今回は10%までに大きく減少した(図5-4)。

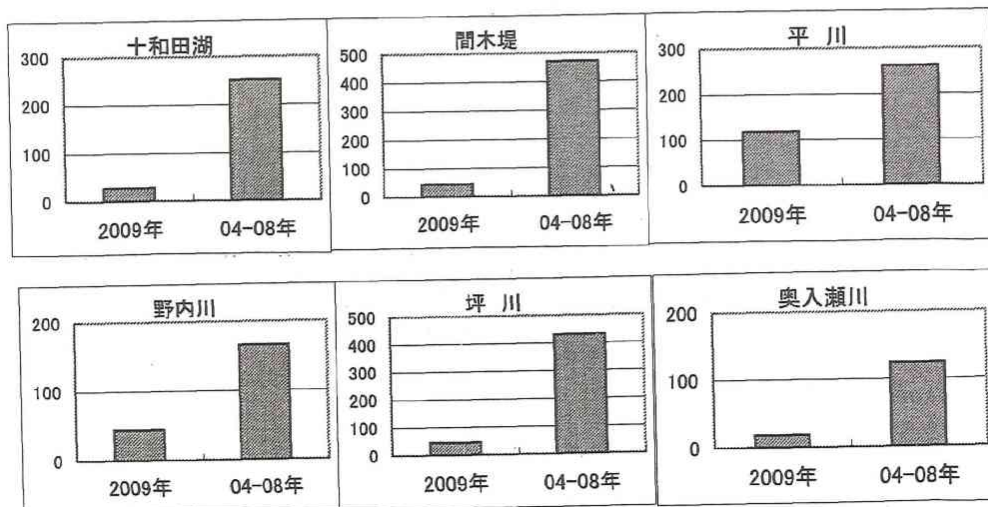


図5-1~6. 場所別の記録(左上から右に5-1, 5-2, 5-3, 左下から右に65-4, 5-5, 5-6)

おいらせ町間木堤は、もとは農業用の溜池であったが、周辺と合わせて公園整備された。700羽を越す県内有数の飛来地である。定期の他、周辺住民や観光客が多く訪れ、現地で販売する餌用のパンを与えている。今回は、9%までに大きく減少した(図5-5)。

藤崎町平川は津軽地域で最も多く越冬する場所である。川岸は整備され公園になっていて、300羽以上が飛来する。定期の他、周辺住民が多く訪れ現地で販売する餌用のパンを与えている。今回は45%に減少した(図5-6)。

まとめ

2009年1月11日の青森県内のハクチョウ類調査結果は、飛来した場所は日本海側を除けば、前年までと同様であった。日本海側については、調査日に暴風雪となり大時化になったのが原因と考えられる。全体の越冬数は、前年より1,439羽少なくなった。また、飛来数が安定していた過去5年間の平均からは1,573羽の減少となった。

今回大きく減少した場所は、定期に餌やりを行っていて、さらに一般人が多く訪れる所であった。一般人だけが不定期に訪れて餌やりをする場所では、大きく減少することはなかった。また、陸奥湾や小川原湖では、定期に餌やりをする場所もあったが、目立った減少は無かった。

では、なぜ定期餌やり中止でも大きな減少にならなかったのか。まず、小川原湖では、餌やり場周辺には護岸されていない所が多いことに加え、遠浅であることから、自然の餌を採ることができる条件にあったことがある。また、今冬は湖が結氷しなかったことも大きな要因になっている。陸奥湾の浅所海岸でも同様に、自然の餌を採ることができる。さらに、内陸部の川では、日中は周辺の田圃で餌を採っていて、川をねぐらにしていた。これは暖冬少雪で、田圃に入ることができたためである。以上のことから、その場所や周辺で自然の餌を採ることができるかどうかによって減少の度合いが違ってくると思われる。しかし、飛来数の変化の要因として気象条件もあることから、今回だけでは結論付けることはできない。今後の調査に期待したい。